

平成 29 年 4 月 26 日

北海道サッカー協会 審判委員会 各位

北海道レフェリーアカデミー第 2 回 議事録

報告者：宗像 瞭（十勝）

<日 時> 平成 29 年 4 月 22 日（土）、4 月 23 日（日）

<場 所> 駒澤大学附属苫小牧高校、苫小牧緑ヶ丘陸上競技場、苫小牧白鳥アリーナ

<参加者>

レフェリーディベロップメントオフィサー : 山崎 裕彦 氏

インストラクター : 伊藤 真也 氏、三上 正一郎 氏、
今川 一輔 氏

審判員 : 堀 悠雅、宗像 瞭、板矢 智志、須摩 和樹

オブザーバー : 北海道強化指定審判員（11 名）

4 月 23 日（土）

8 : 45 集合：駒澤大学附属苫小牧高校

10 : 00 平成 29 年度苫小牧地区春季高校サッカー大会 第 1 回戦

苫小牧中央高校-苫小牧工業高校

(R: 板矢智志 A1: 堀 悠雅 A2: 宗像 瞭 4th: 須摩和樹)

10 : 00 平成 29 年度苫小牧地区春季高校サッカー大会 第 1 回戦

えりも・静内農業高校-苫小牧西商業高校

(R: 須摩和樹 A1: 河上慎之介〈強化〉 A2: 鈴木侑助〈強化〉 4th: 堀 悠雅)

13 : 15 昼食・移動（苫小牧緑ヶ丘陸上競技場へ）

14 : 30 審判員プレゼン「なぜサッカーでは手を使ってはいけないのか」 審判員

堀→手を使ってはいけないこととなった歴史として、まず 1863 年の競技規則統一から手を使ってはいけないことは規定されていた事項であった。その後パブリックスクール及びサッカーの本来の意義（世に出す人間を育てる機関及び競技）のために、危険が伴うラグビー校のフットボールのように、攻撃側が手でボールを持って走るランニング派ではなく、手を使わない方法で競技を行う現在のサッカー派が発生したとされている。

宗像→手を使う反則は、プッシングやホールディング、ハンドリングなどがあり、それらの反則がどのようなときに起こりえるか把握しておくことで、実践の試合でフォーカスして見たほうが良い場面が来た際に対応しやすい。なぜ手を使ってはいけないかについては、手で持って攻撃を行うことにより、反則を受けやすく危険であるため。また、逆にサッカーで唯一手を使っても良いとされる GK について、なぜ手を使って良くなったかを競技規則の歴史から推測した。

須摩→手を使ってはいけない理由について、歴史を紐解き、解説した。規定自体は、競技規則制定当初から規定され、ラグビーとの差別化のためとなっている。また、手を使ってはいけないサッカーの中で、逆に手を使っても良いとされている GK についても調べ、自分にとっても学ぶことができた。

板矢→競技規則の発展と、もし手を使うことを許すとどうなるか…という視点から考えた。ハンドリングについて、実践の試合で判定をする際の考慮事項を整理し、今日の試合でもハンドリングについて思うところがあった。サッカーは紳士のスポーツであり、近年主審を欺こうとするプレーや過度な時間稼ぎなど、紳士のスポーツとは胸を張って言えなくなっている。サッカーの歴史や発展をもう一度よく理解し、本来の意義で紳士にサッカーを行うように導くことが我々審判員の仕事なのだと感じる。

15 : 30 フィットネステスト

(以降強化指定審判員との合同開催)

インターバルテスト 75m-25m 15s-18s ×40 セット



17:00 移動・夕食・チェックイン (チェックイン後苫小牧白鳥アリーナへ)

19:00 英会話 外部講師：苫小牧南高校 山田 教諭

ピッチの平面図を参加者で囲み、コマを用いて様々なシチュエーションを作り、その際に注意することや、レフェリーのポジショニング、アシスタントレフェリーのポジショニング、そのポジションで何を見るかを英語で討論を行った。具体的には、キックオフの場面、スローインの場面、中盤におけるフリーキックの場面、ゴールから 20m ほどのフリーキックの場面、同様に近い距離での間接フリーキックが行われる際の状況を想定し行われた。



20:30 競技規則改正 山崎 RDO

昨年度末ごろに行われた地区での、2級更新講習会の際に改正内容については、統一的に指導があったことかと思う。その中で疑問・疑義が生じた点を審判員から出してもらい、それについてディスカッションを行う。(以下疑問等)

- ・決定的な得点の機会の阻止となるかの判断の際に考慮する事項から「直接 FK または間接 FK となる反則であること」の項目が消えたがその理由は。
- ・PK の際に、主審がペナルティーキックを行うための合図をする前に GK がゴールラインの後ろに位置し、キックがされたときに、ゴールライン上にいるように前に飛び出した際には警告の対象となるか。
- ・キックオフの際に攻撃側の競技者が、ボールを蹴るために他方のチームのハーフコートに入っていることがあるが良いのか。
- ・例えば戻りオフサイドがあった際に、反則が起きた場所から間接 FK により再開するが、副審のシグナルの方法としてスムーズなものとは何か。

21:00 1日目日程終了

2日目

9:00 集合 (苫小牧白鳥アリーナ)

9:00 競技規則テスト 山崎 RDO

10:00 強化指定審判員として 山崎 RDO

強化指定審判員の目的、存在意義や求められていることを4人1組のグループでディスカッションを行い模造紙を用い発表を行った。周りからどう(どのような思いで)見られているかを考え、そのためにどうしたら良いのかを日ごろから意識することが重要。また、求められるものとして例えばリーダーシップや任せられる人間性、立ち振る舞いが必要となる。

11:00 マネジメント 伊藤 INS

「Management」とは、本来ラテン語で「馬を手なづける」という意味が語源であり、現在に至り、「自分が管理するものを手なづける」という意味合いになっている。映像を見て、反則の事象に対し、どう注意をするか、レフェリー役と選手役をつくり、デモンストレーションを行った。デモンストレーションの様子を映像に収め、良かったところ、改善できるところのディスカッションをした。

11:30 上級審判員より 三上 INS

強化指定審判員として活動している中で目標としているものは、「1級審判員資格取得」という共通なものがあるはず。では、その目標を達成するためにどうすれば良いのか、何が必要なのかを把握しているか、考えているか、行動しているか。まず自己把握をしっかり

りして、それぞれが思う1級審判員と自分を比較し、欠けているものが把握できたら、その欠点をどう埋めていくか、やるべきことをやらなければならない。欠けていると思うことは親族や職場などの日常生活からも汲み取ることが可能である。日ごろからかけている部分の向上を意識する。

12:30 昼食 (強化指定審判員研修終了)

13:30 試合分析

(苫小牧中央高校-苫小牧工業高校)

R 自己分析→適切なポジショニングをとれないことが多々あり、判定基準の一貫性に欠けてしまった。一步目の動き出しが遅く、後追いになってしまうことも多々あった。広く視野を保ち、選手の状況や意思を感じ取ることができれば改善につながると考える。また、繰り返し競技規則に違反している競技者に対するマネジメントができていなかった。負傷者の対応については、他の審判員、チーム役員との円滑なコミュニケーションがとれなかった。

INS 分析→争点をもっと真横からクリアに見ようとすることに意識を持つべきである。DFの競技者がフリーで、接触の可能性がなければ、次の争点となりうるものの状況を見ておくことができる。どういう状況なのかを常に知っておくことで、動き出しの改善につなげていけばよい。繰り返し競技規則に違反している競技者のマネジメントができていない。両チームの攻撃や守備等のあらゆるキーマンを気づくことが必要である。

14:30 試合分析

(えりも・静内農業高校-苫小牧西商業高校)

R 自己分析→争点との距離をテーマに試合に臨んだ。争点を近くで見ようとしてしまい選手のプレーの邪魔になってしまう点が多くあった。止まってプレーを監視してしまう事で起きてしまっていると感じた。プレーに巻き込まれてしまい後追いになってしまっているところがあったので今後、どのように争点を監視したらよいかそこを改善しなければならないと感じた。

INS 分析→ハイボールの競り合いの際に競り合いの争点の横で監視する。そのため予測をしポジショニングを取れば串刺しになることがないとアドバイスをいただいた。オフサイドからの再開の際に幅を取り全体を監視できる体の向きとアシスタントも視野に入る体の向きを取るよう意識するように言っていた。スプリントの際にもっと腕を振るようにアドバイスをいただいた。

15:30 teachingmaterial 「positioning」 山崎 RDO

パソコン上の実行ファイルにて、事象ごとの映像を見て、自分が最適と思うポジションとFIFA が考えている最適なポジショニングを比べ、確認を行った。ピッチを細かく分割し、100個以上の選択肢の中からFIFAが理想としたポジショニングの意味を理解すること。

17:00 解散

